

| | |
|--------------|---|
| Title | 大阪工業学校創設時の佐々木政又宛小山健三書簡二通 |
| Author(s) | 大西, 愛 |
| Citation | 大阪大学史紀要. 1983, 3 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/4205 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔資料紹介〕

大阪工業学校創設時の佐々木政文宛小山健三書簡二通

この書簡は佐々木政文の子息佐々木勇藏氏所蔵のものを、『佐々木政文伝』の執筆に当られた藤田貞一郎氏から紹介いただき、今回、鎌谷氏収集にかかる大阪工業学校創立関係資料および論文掲載に当たり、関連づけて掲載させていただいたものである。なお同伝記の中にもこの史料が紹介されている。

佐々木政文は大阪府岸和田出身、明治十九年大阪府会議員を経て明治二十三年衆議院議員に大阪府より選出され、明治三十六年政界を引退するまでの間議員として活躍し、主に大阪地方の産業、金融、鉄道、教育に関与した。中でも教員生活の経験を学校設立運動に生かし、大阪工業学校の設立のほか多くの大阪府下の学校設立に情熱をかたむけている（宮本又次編『佐々木政文伝』）。このことは本誌一一一ページに「衆議院、（大阪）工業学校設置ニ関スル建議案審査特別委員」のメンバーの中に佐々木の名が見られることによっても裏付けられる。

明治二十八年は大阪工業学校創立（明治二十九年五月）前年であり、小山健三は大阪北浜の神戸屋滞在中の佐々木にこの手紙を送っている。小山は東京工業学校教授兼文部書記官から明治二十八年八月に高等商業学校長兼文部省参事官になっている。文中で「転任」とあるのはこのことをさしている。

また、二通目は工業学校創立直後のもので同じく神戸屋方の佐々木宛に宛ている。文面より工業学校長選出についての苦心がよみとれる。片岡とあるのは、このころ大阪府書記官を辞し、日本銀行へ入った片岡直輝のことと思われる。片岡はやがて日銀大阪支店長となり、大阪の財界に活躍した。小山は大阪府書記官時代の片岡から大阪工業学校長として招かれたが辞したという（三十四銀行発行『小山健三伝』）。書簡の中で「参事官ノ古物杯ヲ廻スヨリハ勝レリ」と言っているのはこのことをさしているのかもしれない。しかし大阪築港事業のこと、工業学校のことなど大阪のことも心を動かされていた様子や、大阪方面に向向いたときは、佐々木の郷里である岸和田で大阪の今後について話合いたいという意向がくみとれるように思う。

（資料は四三二ページに掲載）

（大西 愛）

〔資料紹介〕三〇ページよりつづく

(明治二八年)

尊書拝読如仰残熱難凌之処、益御勝常奉賀候、陳ハ此度転官ニ付、早速御懇之祝電を辱うし難有鳴謝之至、不相替文部之内ニ罷在候間、倍旧御懇命希望仕候、借転任ハ致候共兼勤之段を以て矢張工業教育之事担任罷在候ニ付、貴地工業学校ニ関する儀も追々御協議、微力之能ふ限り相尽し候考ニ御座候

先ハ御挨拶旁貴答迄如此ニ御座候、頓首

九月三日

小山 健三

佐々木政父様

侍曹

(明治二九年)

尊書拝読誦梅雨之候益々御清栄奉恭賀候、過般来ハ再度賜貴簡候処、生儀去月北陸巡回後数日間臥床罷在、此頃出勤仕候得共、仍服薬中ニ有之、為ニ甚御疎情ニ打過候、何分御推忍奉願候

大阪工業学校校長之儀、前年ヨリ不容易御配慮被成下候処、何分長シ短シニ而、適任者ヲ得不申、今回伊藤新六郎任命セラレ、同氏ハ校長トシテノ技倆ハ不相分候得共、今日之位置俸給ニ而ハ到底希望之人物ヲ得ルコトハ困難ト奉存候、今後實際上ノ技倆ヲ見タル上ニ而、判定スルノ外無之候、併長く東京工業学校ニ而教員トシテ経験有之候ニ付、参事官ノ古物杯ヲ廻スヨリハ勝レリト被存候、貴市築港其他事業ノ盛大ナル羨望ニ堪ヘザル次第ニ御座候、片岡モ愈々辭職、日本銀行ニ入行仕候、其内貴地ニ罷出候節ニハ御郷里辺ヘモ参趨致度ト仰望仕居候、先ハ貴答旁御左右相伺度、如斯御座候、勿々拝具

六日十五日

健三
拜

佐々木老台
侍史